

巻頭言 「近畿大学福岡キャンパス」

2016年の「近大サミット」では「近大発！日本を変えるー歴史の変革期に生きている使命ー」をテーマに今を乗り越える分野の先人や近大のOBと在学生の議論の場が設けられました。いままでは、近畿大学は、入試産業や予備校が創出した「関関同立」と名付けられた受験リーグの枠での競争が大きな障壁として立ちふさがってきました。スポーツで言うならば、「入れ替え戦なしのリーグ戦」の戦いのなかでもがいてきました。そこでの経験から、近畿大学は独自の道を選ぶことにとり着き、昨年からは近畿大学のキーワードは、「固定概念を、ぶっ壊す。」を宣言し、イメージあふれるCMポスターで情報発信をしています。

ある時代に付けられたイメージを払いのけるためには、周囲が変わらないならば、自らを改革し変身していくという選択をみにつけたこととなります。そして、一昨年から本年度で「志願者数日本一」を三年連続して達成しました。さらに、これまで他大学と比べて手薄であった国際化に対しても遅ればせではありますがスタートし国際学部を創設しました。ここでも新たな仕組み作りをしています。自分にないのであれば他の力に教えを請う、という協力体制も新設しました。このように、近大の力だけではない外部の力までも自分の力にしていく、まさに連携し協働する力を示され、十四学部におよぶ横の力によって「近大はひとつ」を完成させたこととなります。

産業理工学部は本年度創立50周年を迎えました。式典には今日まで力添えいただいた方々を来賓に迎えました。また「近大」という大きな組織のもとに、九州・飯塚の地にひとつの学部として存続してきました。しかし、福岡の地では関西の一学部、出店、としてしか表現されない現実もあります。本学のスポーツも同様です。福岡六大学には入ることもありません、いぜんから近大が関西の地で与えられた状況と同様です。

福岡の地でも「入れ替え戦のないリーグ戦」は永遠に続きます。しかし、近大はこれまで独自の価値観で固定概念を壊してきました。そして産業理工学部は、九州の国公立大学、さらには福岡六大学には入ることもありません。福岡大学や西南大学と同列に並ぶこともありません。しかし他の私立大学や九州に多い単科大学とは異なる新たな道を築かねばなりません。

この生き残りへの宣言をしなければならぬ変革の時が、今ここに来たといえるのです。産業理工学部には国際学科も、留学専科もあります。国際化への取り組みも既存の学科をベースに取り組みなければなりません。

柔軟に、時代を見越した学部学科への変身と運営を進めなければなりませんし、「近畿大学はひとつ」この理念のもとに学部や学科を横断した連携を推し進めていくべきでしょう。

飯塚の地に誕生して50年の歴史を刻みました。それによって地域には多くのOBも在職されています。これらを加えた連携もいっそう強化して行くことが望まれます。そして、今一度「産業理工学部をぶっ壊す」ことが求められています。

近大の改革をとめることはできません。大阪からみれば最西端の学部ではありますが、いまや近畿大学福岡キャンパスの知名度は広がろうとしています。

今日、総合大学の立命館、東海大、早稲田などもこっそりと九州に地方キャンパスを設置しています。近畿大学産業理工学部は、福岡キャンパスであり、地域と連携したキャンパスです。この連携はいっそう強化し「福岡の近大」を位置づける使命が産業理工に課せられたミッションといえます。そして、アジアの福岡、福岡の近大として飛躍することが望まれているといえます。

近畿大学産業理工学部

学部長 井原 徹